

序 文

運動器の役割は、“身体を支えながら動かすこと”であるが、脊柱にはこれらの役割に加えて“神経を保護する”重要な機能がある。椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症によって神経保護機能が破綻し、神経根障害や脊髄障害が生じてしまった場合には、疼痛のみならず麻痺症状などの大きな障害を引き起こしてしまう。そのため整形外科医、特に脊椎外科医は、“いかにして安全に、再発の少ない方法で神経の圧迫を取り除くか？”という命題を追求してきた。さらに近年では極力侵襲の少ない方法を追い求めて脊椎手術の方法はめざましく進歩してきている。

しかしその一方で、神経症状を呈さない、明らかな画像所見を認めず、手術加療を必要としない、いわゆる非特異的腰痛や頸部痛の患者に対する脊椎外科医の取り組みは積極的とはいえ、疼痛を緩和する各種薬物治療に依存している。手術を必要とする患者よりも圧倒的に数の多い、関節機能の破綻によって生じた疼痛や運動障害を有する患者のニーズに応えるためには、疼痛の発生源となる病態を推定し、その発生メカニズムから症状を誘発している個別の身体機能を評価し、個々にあった最適な機能改善介入を行うことが求められる。

本書には、脊椎・脊柱に関するこれまでの数々のエビデンスが豊富に紹介されており、その知識を統合することによって患者のさまざまな病態を推定するための判断材料となる。本書の知識を活用することで、より多くの腰痛や頸部痛の患者に正しい対処方法が行われるようになることを願う。

2017年9月

早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 金岡 恒治

SPTS シリーズ第 12 巻 発刊によせて

SPTS はその名の通り“Sports Physical Therapy”を深く勉強することを目的とし、2004 年 12 月から企画が開始された勉強会です。横浜市スポーツ医科学センターのスタッフが事務局を担当し、2005 年 3 月の第 1 回 SPTS から現在までに 12 回のセミナーが開催されました。これまで SPTS の運営にご協力くださいました関係各位に心より御礼申し上げます。そして、この度、SPTS シリーズ第 12 巻を発刊させていただき運びとなりました。

本書は 2016 年 3 月に開催された第 12 回 SPTS 「脊椎疾患のリハビリテーションの科学的基礎」における発表を文章化したものです。文献検索は、セミナー発表準備時期である 2016 年 1 月前後に行われ、さらに本書の原稿執筆時期である 2016 年 4～8 月ころに追加検索が行われました。したがって、本書には 2016 年夏ころまでの文献レビューが記載されています。

本書では、頸椎から仙腸関節まで、脊椎に発生するスポーツ外傷・障害を網羅した内容となっています。特に、コンタクトスポーツなどで発生する頸椎外傷は、生命にもかかわる重大な問題を引き起こす可能性があり、スポーツにかかわるうえで軽視することはできません。さらに胸椎・胸郭、腰椎、仙腸関節についての疫学、病態、診断学、評価、治療法、治療成績などについての文献レビューを行いました。そのなかで特筆すべきは、保存療法に関する論文があまりにも少ないという点です。この分野での研究を進めるには理学療法士の関与は不可欠であり、他施設研究に適合しやすいシンプルな介入方法と主観的・客観的なアウトカムの開発が不可欠であると思われまます。

本書が、脊椎のスポーツ疾患に携わるすべての医療従事者、アスレティックトレーナー、研究者のパートナーとなることを祈念しております。臨床家はもとより、論文執筆中の方、研究結果から臨床的なアイデアの裏づけを得たい方、そしてこれからスポーツ理学療法の専門家として歩み出そうとする学生や新人理学療法士など、多数の方々のお役に立つものと考えております。本書が幅広い目的で、多くの方々にご活用いただけることを願いたします。

末尾になりますが、SPTS の参加者、発表者、座長そして本書の執筆者および編者の方々、事務局を担当してくださいました横浜市スポーツ医科学センタースタッフに深く感謝の意を表します。

2017 年 9 月

広島国際大学総合リハビリテーション学部リハビリテーション学科 蒲田 和芳

【SPTSについて】

SPTSは何のためにあるのか？ SPTSのような個人的な勉強会において、出発点を見失うことは存在意義そのものを見失うことにつながります。それを防ぐためにも、敢えて出発点にこだわりたいと思います。その質問への私なりの短い回答は「Sports Physical Therapyを実践する治療者に、専門分野のグローバルスタンダードを理解するための勉強の場を提供する」ということになるでしょうか。これを誤解がないように少し詳しく述べると次のようになります。

日本国内にも優れた研究や臨床は多数存在しますし、SPTSはそれを否定するものではありません。しかし、“井の中の蛙”にならないためには世界の研究者や臨床家と専門分野の知識や歴史観を共有する必要があります。残念なことに“グローバルスタンダード”という言葉は、地域や国家あるいは民族の独自性を否定するものと理解される場合があります。もしも誰かが1つの価値観を世界に押し付けている場合には、その価値観や情報に対して警戒心を抱かざるを得ません。一方、世界が求めるスタンダードな知識（または価値）を世界中の仲間たちとつくり上げようとするプロセスでは、最新情報を共有することによって誰もが貢献することができます。SPTSは、日本にしながら世界から集められた知識に手を伸ばし、そこから偏りなく情報を収集し、その歴史や現状を正しく理解し、世界の同業者と同じ知識を共有することを目的としています。

世界の医科学の動向を把握するにはインターネット上での文献検索が最も有効かつ効果的です。また情報を世界に発信するためには、世界中の研究者がアクセスできる情報を基盤とした議論を展開しなければなりません。そのためには、Medlineなどの国際論文を対象とした検索エンジンを用いた文献検索を行います。MedlineがアメリカのNIHから提供される以上、そこには地理的・言語的な偏りが既に存在しますが、これが知識のバイアスとならないよう読者であるわれわれ自身に配慮が必要となります。

では、SPTSは誰のためにあるのか？ その回答は、「Sports Physical Therapyの恩恵を受けるすべての患者様（スポーツ選手、スポーツ愛好者など）」であることは明白です。したがって、SPTSへの対象（参加者）はこれらの患者様の治療にかかわるすべての治療者ということになります。このため、SPTSは、資格や専門領域の制限を設けず、科学を基盤としてスポーツ理学療法最新の知識を積極的に得たいという意思のある方すべてを対象としております。その際、職種の枠を超えた知識の共通化を果たすうえで、職種別の職域や技術にとらわれず、“サイエンス”を1つの共通語と位置づけたコミュニケーションが必要となります。

最後に、“今後SPTSは何をすべきか”について考えたいと思います。当面、年1回のセミナー開催を基本とし、できる限り自発的な意思を尊重してセミナーの内容や発表者を決めていく形で続けていけたらと考えております。また、スポーツ理学療法に関するアイデアや臨床例を通じて、すぐに臨床に役立つ知識や技術を共有する場として、「クリニカルスポーツ理学療法（CSPT）」を開催しております。そして、SPTSの本質的な目標として、外傷やその後遺症に苦しむアスリートの再生が、全国的にシステムティックに進められるような情報交換のシステムづくりを進めて参りたいと考えています。